

V. J. ベニット

ヘルマン・ヘッセの作品における女性の役割（VI）

内 尾 一 美
渡 辺 信 生 訳

ヘッセの女性像（2）

大成功を収めたヘッセの最初の作品『ペーター・カーメンチント』では、彼の初期のある作品に始まったパターンが、潤色され敷衍されている。カーメンチントは心の温かい、感じ易い人物、かなりのんきな所のある人間で、同じ村に一生変ることなく存続する古いカーメンチント家の伝統を打ち破るために、家を出る人物である。彼が会おう女性たちと、永続的で有意義な関係を作る機会はいくらでもある。彼は知り合いになった数人の若い女性に惚れこむ。だが、彼の愛と崇拜は例外なく表現されないままで終るか、あるいは、自分の感情を告白する勇気を出す場合には、決して報われないか、どちらかなのである。なんらかの理由でその若い女性は、ペーターに対してロマンチックな気持ちを持たないか、それともすでに他の誰かと婚約しているのか、どちらかなのである。実はこうした状態は、ヘルマン・ヘッセ自身の状態、つまり、まだ若い頃の恋愛問題における無能と失望との反映なのである。

早くも第2章の冒頭で、ヘッセはレージー、エルミニア、エリーザベトとの後で起る恋愛の際に、ペーター・カーメンチントの身の上に生じることになっている、不幸と失望のパターンを明らかにしている。ちょうど彼以前のゴットフリート・ケラーのように、ヘッセも彼自身の最も本質的な洞察や傾向を、いくらか主人公を通じて語らせている。カーメンチントが女性を賞讃し、同時に女性に対するその熱烈な感情を行動に移して成功させる際の、完全な無能を認めているのは、驚くにはあたらない。人々は、ペーターが苦しむに違いない差し迫った挫折にただちに気付く。なぜなら、若い女性との報われない、したがって表面的な関係以外の結果になるかもしれない行動の計画をさえ立てるのに十分な自信が、彼には

欠けていることが明らかだからである。

「愛について語るには……この点では私は生涯少年のままであった。私にとって女性に対する愛は、常に淨らかな崇拜であった。私の陰うつな心の炎が空高く燃え上ることであり、両の手を青い空に高くのばして祈ることであった。母ゆずりであり、それに私自身のあいまいな感情からも、私は女性全体を、見知らぬ美しい謎めいた種族として尊敬した。この種族は、本性の生れながらの美しさと虚栄心とによって、我々よりすぐれていて、我々はこの種族の神聖さを保持して行かねばならないのである。なぜなら、この種族は星や青い山頂のように、我々から遠くへだたっていて、神により近いように思われるからである。過酷な生活がそれになっぶりからしを振りかけたので、女性の愛は甘さと同じくらい苦さを私に教えてくれた。なるほど女性は、相変らず高い台座の上に立ってはいたが、崇拜する司祭のおごそかな役割は、笑いものにされた愚か者の痛ましい骨稽な役割に、余りにも簡単に変ってしまった。」²⁷

このような予言的な洞察にも拘らず、ペーターはやはりレージー・ゲルトナーにいやおうなしに引き寄せられ、手がつけられないほど彼女に夢中になる。彼女は、ペーター自身の告白によれば、むしろ彼の母とその影響に属すると彼が考えている遠い近づきがたい面を体現しているように思われる。

レージーとペーターとの全エピソードが意味しているのは——もしこのような一方的な関係がエピソードと呼ばれ得るのなら——この出来事全体がペーターにとって失敗に終ることになっているということである。彼は、自分のチャンスを全然高めはしないようなとても馬鹿げた態度ばかり取るので、彼女となんらかの正常な関係を打ち立てることのできる方法は考えられない。けれども彼女は、彼に関する限りはいつまでも一番美しい王女なのである。

「この私の初恋は終らず、解決もされず、もの問いたげに私の青春の年月の中へ消えて行った。そしてもの静かな姉のように、私のその後のさまざまな恋愛につき添った。今でも私は、あの若い、生れの良い、もの静かな眼差しをした名門の娘より高貴なもの、純粋なもの、美しいものを思い浮かべることができない。」

28

上述したように、このパターンは、ペーター・カーメンチントが異性と対決する場合だけでなく、ヘッセによって創造された他の人物たちの同様な試みの場合にも繰り返されることになる。ペーター・カーメンチントの後に続くこれらの人物たちはすべて、自らの人生におけるディレンマを解決し、それによって心のバランスと正常さのようなものを、多少とも獲得しようとする著者の必死の試みの反

映なのである。

ペーターの第2の恋愛の初めに……再び片思いであるが……ペーターは彼自身のより良い判断に反してさえ、エルミニア・アグリエッティのために、モデルとしてポーズをとることに同意する。2人の間には何も起り得ないということを彼は確信している。けれども彼らが親しくなるにつれて、ペーターは彼女との恋におちいる。彼はこの若い女性から、少くとも形ばかりの愛のしるしでも得たいと期待しつづけるのだが、不幸なことに決してそれを受取りはしない。ごくわずかだが彼女が彼を勇気づけるときがあるにはある。そして彼らの関係は……ペーターによれば……ある日、彼女と一緒に小さなボートに乗っているとき、彼が心底深く秘めた感情を、まさに彼女に打ち明けようとする所まで、確かに進展はする。「……私はそれに殆んど注意を払わず、舵をとっている女をひたすら見つめていた。もくろんでいた愛の告白は、鉄の輪のように重くどきどきする胸にかかっていた。」²⁹彼は、彼女が今までに恋をしたことがあるのかどうか、もしかしたら彼女は余り利口すぎ、誇りが高すぎて恋などできないのではないかと大変不器用にぎごちなく尋ねると、彼女はある男を深く愛していて、その男も同じように深く愛していると答える。言うまでもなく彼女の答はひどい打撃であるが、それにも拘らず慈悲深い打撃である。なぜなら、ばかなまねは少しもしないですんだということで、彼は言葉に表わせないほどほっとするからである。

「ボートはスピードをあげて水面を滑った。胸にたぎる悲嘆と屈辱の渦のただなかで、大粒の汗が顔をつたうのを感じると同時にぞっとした。あやうく自分はひざまずいて懇願し、母親のようにやさしく拒否される恋人の役を演じるどころだった。ということをつっかり考えてみると、心の底からぞっとした。少くともこのことだけは免れたのだ。残った悲しみのことは、何とかあきらめるのが大事だった。私はつかれたように岸を目ざして漕いだ。」³⁰

この苦い失望の結果、ペーターはアルコールの力を借りて心の傷を麻痺させるのが唯一の慰めというところまで追いこまれる。このような態度は、ほんの一例だけあげれば、パート・カンシュタットに滞在していたときに、ヘルマン・ヘッセが置かれていた苦境を大いにしのばせるものである。

自分が思っているほど創作活動をするのができないと確信して、ペーターは以前たびたび訪れていた「学者の家」へ再び出かけて行く。自分は2度と再びエルミニアに会うことはあるまいと自覚しながら、新規まき直しをして、作家として自ら定めた目標に到達するために、彼はパーゼルに戻る。これはそれほど不可能な決心ではない。なぜなら、「学者の家」で彼はエリーザベトという名前の非

常に魅力的な若い女性に出会うからである。以前の困惑の結果、ペーターは彼女に対する新たな限りない愛情と讃美を、完全な秘密にしておくことを選ぶ。どういうわけか、彼はもっと個人的で親密な関係を作ろうという試みは全然せずに、遠くから彼女を讃美することではおかに大きな満足と喜びを得るのである。

一連の恋愛事件のこの3番目の結果は……勿論これもまた片思いなのだが……ペーターが結局空高く羽ばたく空想の実現はあり得ないことをさとるということである。なぜならエリーザベトが最近花嫁になってしまったからである。ペーターにとって、エリーザベトはもう1人のエルミニア、もう1人のレージーになってしまったのである。彼には、彼女の幸福を祈り優雅に身を引く他に残された道はない。恋愛事件におけるペーターの絶え間ない優柔不断と失敗の最も妥当な理由の一つは、おそらくこの時期まで、自分は全く結婚に向けてはいないという確信であったろう。

「そして私は初めて女性に求婚しようと真剣に考えることになった。今まで私は結婚には全く向いていないと思いこんでいたので、痛烈なイロニーで甘んじていたのであった。私は詩人であり、旅人であり、酒のみであり、変人であった！」

31

ペーターはこの最も新しい出来事から、事実上自信と自尊心を奪われ、深い幻滅を感じ、殆んど苦い思いをなめた青年として姿を現わす。ちょうど彼が以前に自分は結婚には向いていないと確信していたように、すべての男にとって人生を完全に惨めものにするために、女たちがある種の陰謀を企てているように思われる、と彼は今や主張するのである。魅力的な女から夫にと申しこまれさえしたイタリアでの楽しい一つの体験にも拘らず、「彼女たちは自分に惚れこんだ男たちの絶望的な苦悩に、残酷な喜びを覚えるに違いないかのようなかすかな不信を、ペーターは女たちに対していぜんとして抱いていたのである。」³²

著者自身と全く同様に、ペーター・カーメンチントは異性とのかわりを完全に避けたら、危険はずっと少ないという結論に到達する。この決心の当然の結果は、今後は女とのいかなるかわり合いをも完全に避けること、そしてペーターが非常に鋭敏に感じている空虚と不安定を、何とか補償するために、男性との交友に次第に移行することである。ヘルマン・ハッセの実情もこのようなものであった。なぜなら、彼の作品における友情のペアは、男女のペアよりも無限に重要な役割を演じているのだから……彼自身の人生でも目立って多かった現象である。けれども著者自身の場合には、この態度はある程度穏やかなものになっていて、彼のより成熟した時期における異性との一層意味深い関係を可能にしたので

ある。

しかしながら、女性の人物を背景に、すなわち、重要でない、殆んど取るに足りない役割に移すという、『ペーター・カーメンチント』において全く明快に確立されたこの一定のパターンは、ヘッセのその後の全作品の中で継続されている。小説『車輪の下』では、事実上女性の登場人物がいないのは興味深いことである。著者自身の生活は言うまでもないが、『車輪の下』と『ナルチスとゴルトムント』との序章には、極めて密接な類似点があるが、その序章では新参者たちが、自分たちの通うことになっている学校における修道院生活の厳格さと規律に引き入れられるのである。少年たちが修道院に入学してくるとき、どちらの場合も母親は存在しない。一方では、ハンス・ハイルナーの母親は故人になっており、他方、ゴルトムントの母親はでたらめな女で、その結果夫から離婚されていた。そこで修道院に入ってきたばかり少年たちの描写と、マウルブロン为学校に入学したときの著者の実際の体験に、密接な相関関係を立証することは困難ではない。ヘッセが神学校に入学したあの特定の時期には、なるほど母親は元気でぴんぴんしていて、彼女の貞節は非難のしようがなかった。だが『車輪の下』と『ナルチスとゴルトムント』の両方の母親像が、ヘッセの発展のあの特定の段階で、母親について抱いていたイメージと重なるものであることは、全くあり得ることである。彼にとって母親は、同じ様に手を伸ばしてもとどかない、常に伝道の仕事に従事している、等々であった。彼の母親がパーゼルの伝道学校に没頭し、同時に彼女自身の子供たちの手近な必要や欲求よりも、宣教師たちの幸福と彼らの問題の方に、明らかにより大きな気づかいを示していることは……これは自分たちの母親によって、子供たちがある意味で見捨てられることであるが……著者がゴルトムントの母親を、無責任で信頼できない女として描いている点に、確実に反映されているであろう。『ゲルトルート』では、ヘルマン・ヘッセが諸作品の中の他のどの女性の登場人物に対するよりも、女性の指導的役割に対して、より大きな配慮をしているのは適当なことだ、と見なしているという意見はすでに述べた。もちろん、「他の女性の登場人物」というのは、むしろそれが存在しないということと異彩を放つのである。なぜなら、明らかに女性は殆んど登場しないからである。小説『ゲルトルート』の中心は、何よりもまず芸術家一般の直面するディレンマと葛藤の解明であり、第2に彼自身の結婚における、絶え間のない挫折と失望に対する著者の分別のある個人としての態度の、殆んど無意識の内省熟考であるように思われるので、彼の両親に対する青年期の関係は、殆んど解明されていない。けれども『ヘルマン・ラウシャー』の場合と同じように、この小説の導入

部でも再びヘッセは、彼自身は決して口に出さなかったとしても、彼が感じていたに違いない言葉を、わざわざ若いクーンに言わせている。若いクーンは母親に対する関係について、「しかし我々の関係は、大変親密というものでは決してなかった。いつも私はより多く父の味方だった」³³と語っている。

クーンのこのような態度を小説の中に描きこんで暴露したヘッセの意図は、ある意味では彼自身の先入観を暴露することである。彼はまた同様にバッハオーフェン学習の形跡をのぞかせている³⁴。彼が、女性支配の構造から、男性支配を保存する要因として今日まで残っている、強固な古代ローマの法体系の出現の結果として生じた男性支配の構造へ、という社会の進歩を、自分のいくつかの小説の中で、ある程度対応させているからである。

この小説のずっと後の方で、長い留守の後で帰宅したとき、クーンは自分と両親との関係をまたしてもつくづく考えてみる理由に気付く。

「両親の家には私はまる1年行かなかった。今度クリスマスに出かけて行った。母は私には優しくだったが、私たちの間にあった古いわだかまりは残っていた。私のわだかまりは理解されていないことへの恐れであり、母のそれは私の芸術家の職業への不信と、私の努力の真剣さに対する疑いであった。」³⁵

クーンが母親より父親の方に好意を持っていることは、この同じ休暇中に、父が病気から回復しかけていたとき、父と交した会話に示されている。

「私は一週間家にいて、がまん強い病人ではない父のベットのそばにたびたび坐っていた。父はもちろん足の小さな怪我の他にはとても元気で健康であった。私はもっと早く父にとって望ましい人間になって、父に近づかなかったのは残念だと父に告白した。しかし父は、それはお互いさまで、そうしない方がお互いの将来の友情には都合がよいだろうと言った。……だが父に対するこの新しい親しい関係は、私には気持のよいものだった。それはこの数年殆んどどうでもよいものになっていた故郷を、再び私にとって好ましいものにした。」³⁷

さて、小説『ゲルトルート』の主要な人物たちの分析をしよう。クーンは音楽の作品を、十分な資力と影響力を持った適当な人物に聞いてもらう必要のため、しばらくの間懸命に努力していた。彼はタイザーというヴァイオリン奏者の注目をひくことに成功した。タイザーは売り出し中のワーグナー歌手、ハインリッヒ・ムオトの前で、クーンの音楽が演奏されるように取りはからってくれた。クーンは今やしばらくの間、ヴァイオリニストとしてオーケストラに雇われ、リハーサルや演奏で忙しくないときには作曲を試みる。裕福な芸術のパトロン、イムトール氏が、クーンの作曲した三重奏曲を演奏するために、クーンを家に招待した。

この演奏会で彼はこの裕福な実業家の娘、ゲルトルートと知り合いになる。クーンは彼女を全く燃えるような、玉虫色の言葉で……このような女性に対する彼の非常な讃美の気持を表わすと同時に、ゲルトルートのような女性をおよそ自分自身のものにするに對する、彼の無力感をも伝える言葉で……描写している。

「ゲルトルートはあの頃20才を越えてはいなかった。若い繊細な木のようにすらりとして健康であった。そしてありきたりの若い女の子のくだらなさには無縁で、確実に進むメロディーのように、彼女自身の高貴な本性に従って身を持っていた。この不完全な世の中に、このような女性が生きているのを知るのは、気持のよいことであった。たとえば彼女を捕えて私一人のために奪い去るなど、私には考えられなかった。彼女の美しい青春に多少とも関わることができ、それに最初から彼女の親しい友だちの一人であるということで、私は嬉しかった。」³⁸

クーンはイムトア家の常客になる。そしてゲルトルートに会い続けるにつれて、磁石にひかれるようにますます彼女に惹きつけられる。この数ヶ月の間、ゲルトルートはクーンの最新の傑作の中で、ハンサムなムオトと向き合せて、女性の主役の稽古をするように説得される。状況は明らかに彼ら3人を以前よりずっとひんぱんに、互いに接觸させることになる。そしてゲルトルートの方は、彼らのどちらに對しても殆んど反応を示さなかったけれども、クーンの方はしばしば限りない熱情を抑えるのが困難なほど、彼女に夢中になってのぼせあがる。

「確かに私は愛とは何かを知っていると思っていた。この点では私は賢明だと思ひ、安心して新しい眼で世間を見、あらゆる生活にかなり親しい深い共感を覚えていた。ところがそれが変わったのだ。今やそれは明るさ、慰め、快活さではなくて、嵐と炎であった。今や私の心は歓声をあげ震えながら我を忘れ、生活はもうどうでもよく、その炎の中でただ焼けつくすことだけを望んだ。」³⁹

彼は激しい情熱を抑える苦痛とあがきの長い夜々を経て、結局心の奥深い秘密を、この自然で美しい女性に打ち明けても、報いられることはありえないと結論に到達する。

「彼女は私の音楽を愛していたばかりではなく私自身にも好意を抱いてくれて、私と同じように、私たち2人の間にある自然な調和があること、私たちのどちらも相手の人柄を感情的に理解し承認し合っていることを感じていた。こうして彼女は協調と友情のうちに私と並んで進んだが、情熱を以てというのではなかった。ときどきそれに満足して、私は彼女のそばで静かな感謝にみちた日々を送ったりした。だがしばらくするといつも情熱が割りこんできた。すると彼女の親切はすべて私には施しにすぎなくなった。私をゆすぶる愛と欲望の嵐は、彼女には無縁

で好ましくないのだということを感じて私は苦しんだ。」⁴⁰

上記の引用文は、自分の子供に平常通り以上の愛情を示すときの、マリーア・ヘッセの殆んど奇妙とも言える態度に関する、フーゴー・バルの考察とぴったり一致している。バルは彼女がいかなる官能的衝動をも受けつけなかったと次のように述べている。

「……いかなる官能的な衝動をも、彼女を捕えるかも知れないいかなるナルチスの自己愛をも受けつけなかった。実際、官能の衝動や自制心の欠如、自由奔放な心の動き、更には放縦といったようなことのほんのわずかな徴候さえ、彼女の心を傷つけることになるだろう。彼女を彼女の他の世界の中へ一層深く追いこむことになるだろう。その結果彼女は冷淡さと心外さを抱くことになるだろう。」

41

そこでクーンが最大の敬意と讚美の念を抱いたこの女性に、このような冷やかかて控え目な態度をとらせているのは全く驚くには当らない。なぜならこれと同じ態度は、ヘッセと母親との関係の中にも……これがこの独特の傾向のモデルなのだが……また女性一般に対する成人した個人としての彼の関係の中にも、共にあったに違いないからである。

ペーター・カーメンチントとヘルマン・ラウシャーがとった行動の成行きとしては逆に……あるいは多分いかなる行動をもとらなかったという方がより適切だろうが……クーンは勇気を出してゲルトルートに手紙を書き、彼女に対する熱烈な愛情を打ち明ける。彼は極めて傷つき易い自我を打撃から守ろうとして、半ば冗談めかして次のように書く。「私が全然眠れないのは、彼女への憧れのためです。私の場合は愛なので、彼女の友情はもはや受け入れられません。」⁴² 返事の手紙で彼女の反応は、彼の告白が彼女をかなり当惑させたということである。

「親しいお友だち！あなたのお手紙は私を当惑させます。あなたが悩み苦しんでいらっしゃるのわかります。でなければあなたがとても思いがけないことをなさるので、文句を言わねばならない●でしょう。私があなたにどんなに好意を持っているか、あなたは御存知です。でも今の状態を変えたいという望みはまだありません。もしあなたを失う危険に直面したら、あなたを引きとめるために私はどんなことでもするでしょう。でもあなたの熱烈なお手紙には、御返事できません。がまんなさって下さい。」⁴³

失望し幻滅してクーンは傷ついたプライドをいやすために、通いなれた彼女の家を訪れるのを避ける。ゲルトルートの返事によって、彼はすっかりみじめな思いをしたばかりでなく、すべての人が多かれ少なかれ必要とする心の安定につい

て、自分の立場をよく考えてみるにつれて、自分が非常に不安定な立場に置かれているのに気づく。

「私は自分の道をどんなに孤独によそよそしく歩いたことだろう。どこへ行くのかも知らずに、私はどこにも根を下ろさず、どこでも居住権を手に入れなかった。両親とはていねいな手紙によって、表面的なつき合いをしているにすぎなかった。私は自分の職業を捨てて、危険な創造者の空想にふけたのだが、その空想も私を満足させてはくれなかった。」⁴⁴

もちろんこれは著者が極めて困難な人生で、何度も直面したのと全く同じ苦境である。最初ヘッセは芸術家として、両親から特に評価されもせず、理解されもしなかった。と言うのも特に彼の両親は、彼は先祖代々従事してきた、偉大な伝道の仕事を引きつぎたいと思うべき人間であり、またたとえ伝道の仕事ではないとしても、その場合は十分な経済的安定をもたらす、なにかに立派な職業につくべき人間であると思っていたからである。

上記の引用に述べられているような芸術家の苦境を、全く伝えられるところのヘッセの母親の愛の欠如のせいにしてしまうと試みるのは、どちらかと言えば不当であろう。『ゲルトルート』に述べられているような、クーンの漠然とした家族関係を、ある程度はヘッセ自身の先行する不幸な体験のせいにする理由はある。しかしそれ以上に、それはクーンの前後の他のヘッセの登場人物たちと同じように、絶えず誤解され締め出されて苦しむ運命にあって、ただ一人孤独な道を旅するように強いられている、ディレクタント・クーンの全く私的なディレンマなのである。

ゲルトルート、クーン、ムオトは現存する「三角関係」にも抱らず、オペラのリハーサルを続ける。クーンは事態がミュンヘンにおける祝典公演の準備の方向で進んでいることで満足しているが、またハインリッヒとゲルトルートがますます多くの時間を共に過しているのに気づいて、少々うろたえもする。この2人が自分たちの結婚の計画を告げるのは、時間の問題にすぎない。そして再び希望、歓喜、拒絶、それから苦い失望というあのパターンが繰り返される。

ハインリッヒに対するゲルトルートの愛は、極めて盲目的なものなので、彼女はハインリッヒがすでにその人生で、他の女たちに対して取ってきたパターンを見抜くことができない。彼はまず彼女たちを誘惑し、それからあらゆる気紛れを満足させてから、あっさり彼女たちを捨て去り、忘れてしまうのである。けれどもゲルトルートは結婚の計画を実行してしまう。だがしばらくすると、彼が酒を飲んでではな騒ぎを演ずるのを非常に心痛して、彼女は実家へ帰って父とも

に暮すことになる。クーンは結婚が破綻したのを知るけれども、ゲルトルートを自分のものにしたいという欲望に従うのを拒む。クーンは「彼女の心はもはや彼女の夫のものではなく、自由なのだ。彼女を2度と失わず、私のために獲得し、どんな嵐や苦悩からも私の胸で彼女を守るのが、今や私のやるべきことなのだ。」⁴⁵と理屈の上では考える。この熟望が実現されることには全然ならない。彼がすぐ自分の状況が役に立たないのに気づくからである。

「たとえ私が彼女の心を得るために、友人である彼女の夫を無視して、自分の欲望に従うほど愚かで卑劣だったとしても、悩みながら頑固に苦しみに堪えているこの優しい女性の眼差しの下では、同情と慎重ないたわり以外のものを以て彼女に近づくことは、恥じざるを得なかったであろう。彼女も悩めば悩むほど、そして恐らくは希望を失えば失うほど、ますます誇り高く、近づき難くなって行った。……彼女はその高い姿と美しい濃い金髪の頭を、今までになくますます気高く保って、私たちの誰もがほんのかすかな身振りによってでも、彼女に近づき、彼女が耐えているのを助けようとするのを許さなかった。」⁴⁶

もしクーンが友人ハインリッヒ・ムオトに対して、こんな痛ましいほど礼儀正しくなかったなら、そしてこれほど誠実でなかったなら、自分の情熱に屈服するチャンスが、僅かにせよあったかもしれない。けれども著者自身が似たような状況に苦しみ、常に無傷の自尊心を抱いて、そうしたいざござから離れて行ったということを思い出す必要がある。彼はその行動について、男女両性に対する誠実さの喪失のかどで、非難されることは決してありえなかった。彼の大事な友はいつまでも彼の最も大切な財産であり続けたし、この時点までは、「両親の明るい世界」と結びついている女性は、常にヘッセの尊敬と崇拝を受けたのである。恐らく女性の「否定的な印象」と言われるものを創作することに、かりそめにもヘッセが多く時間を費やした実例はほんの僅かしかない。この研究の中で後に言及されることになる適切な例は、『クラインとワーグナー』のクラインの妻、『荒野の狼』の下宿の女主人、それに多分『ペーター・カーメンチント』と『ロスハルデ』の中の妻の像であろう。

『ゲルトルート』に話を戻すことにしよう。酒とだらしない生活に耽り、しかもその間ずっと自分は依然として妻のゲルトルートを深く愛している、と主張する友人ハインリッヒの悲劇的な没落と破滅によってクーンは苦しむ。この2人の友人が、共に過した極めて真剣で心のこもった晩の一つから別れたその晩に、彼は死体となって発見される。ハインリッヒが埋葬されたあとのもう結末の場面に至ってさえ、クーンは依然として時折多分彼女に求愛し、彼女と結婚するという

観点からゲルトルトのことを考える。しかし「私の人生にも彼女の人生にも、もはや訂正できるものは何ひとつなかった。彼女は私の友人である。そして私が落ち着いた孤独な時間を過ぎてから、静寂を抜け出して歌かソナタかを一つ作ると、それはまず私たち2人のものなのだとすることを」⁴⁷ ひそかに知っているという最初の確信を、彼は持ち続けているのである。

ヘッセは再び彼自身のある部分が、すなわち、ムオトによって特色づけられ人格化された感覚的な要素を……彼の「影」のうわべだけの否定によって、つまり彼の「分身」の排除によって……彼が共に生きることのできる意識のあの側面、すなわち、芸術家であり禁欲者であるクーンの側面を維持するために、抑圧したように思われる。ヘッセの本性的な感覚的な側面を人格化した、人としての人物のこのような排除は、この著者の作品の中で唯一の事例ではない。2例だけをあげれば、『デーミアン』におけるクローマーのエピソードを振り返るか、あるいは『王様の祭り』における若い王子の若死を思い出しさえすればよい。

『ロスハルデ』の中のヘッセによるフェラグートの妻の描写は、女性の役割について、これまで述べられてきたいくつかの考えを正確に表わしている。けれども言及に値すると思われる上述のいくつかのシチュエーションには、さまざまな著しい類似点がある。登場人物たちの状況は、『ラウシャー』と『カーメンチント』の中で明示された、全く独身男性対乙女の関係から、クーン、ムオト、ゲルトルトの三角関係に明らかにされた、いわば独身者対結婚者の関係へと前進した。すなわち、クーンはゲルトルトがハインリッヒと結婚したあとでさえ、彼女を偶像化したり讃美したりし続ける。しかし彼らの間にいんぎんな距離は保つのである。それからなんらかの理由で、一緒にうまくやって行くことのできない結婚した2人のディレンマが生じる。ヘッセの男性対女性の関係のこの側面が占める割合は、この研究のために選ばれた諸作品に含まれている他の側面に比較すれば、巨大とは言えないけれども、結婚の不調和というこの着想そのものは、極めてしっかりした根拠を持っていたのである。すなわち、彼が試みた3作品全部において、2人のパートナーを結婚させようと企てるときに味わったヘッセの苦闘の中に。

理想的な結婚相手とは言えない誰かによって負わされた重荷に対する、著者の不名誉と不幸の感情を説明するのに、二つの例で十分であろう。一つの例は『ロスハルデ』から取られていて、もう一つは『クラインとワーグナー』の導入部の数頁に見いだされる。どちらの例においても、夫が置かれている悲しむべき事態は、本質的には妻のせいだと推論できるので、妻の人物像についてはかなり手きびしい批評がなされているわけである。

極めて興味深いことに、『ロスハルデ』の状況は、妻から疎遠にされているが、依然として妻と同じ屋敷のアトリエに暮している父親ヨーハン・フェラグートが、息子のピエールの愛を得ようとして、妻と競い合うというものである。長男アルベルトの愛情をめざす争いで妻のアデーレに敗れたので、彼はピエールを「味方に引き入れる」ために恐らくどんなことでも試みていることだろう。ヨーハン・フェラグートによってなされたこのような行為の原因は、もともと彼らの結婚のごく初期に、妻アデーレは彼の要求と期待を全く満たさない、満たすことができないとの結論に達したという事実である。

「妻とは最初から難しいところがあったのを、君は知っているね。数年間はよくも悪くもなかった。あの頃ならまだ何でも救えたかも知れない。だが私は失望をかくすことができなかった。私はアデーレに、彼女が与えることのできないものばかりを繰り返し要求していたのだ。彼女は澁刺としたところがなかった。まじめで重厚だった。それには前以て気づくことができたはずなのだが。少々のごことは大目に見るとか、何か重大なことをユーモアか軽い気持で乗り越えるとか、そういうことは決してできなかった。彼女は私の要求や気まぐれ、激しいあこがれやとどのつまりの失望に対して、沈黙と忍耐、感動的で物静かな英雄的な忍耐で対応することしかできなかった。その忍耐は私をしばしば感動させたのだが、私も彼女も助けてはくれなかった。」⁴⁸

それ故この小説の葛藤の根底にあるのは、ヨーハン・フェラグートが所属し受け入れられ理解されたいという要求に非常に敏感であり、妻から十分に満足を得られなかったということ、その結果物足りない思いを満たすために息子のピエールに心を向けるということのように思われる。

フェラグートは増大する要求と、芸術家一般に個有のそれよりも強い感受性という更につけ加わった重荷の下で苦しんでいる。しかしこの状況は実は出来事全体の核心ではない。一方では、ヘッセは彼自身の結婚という枠組の中で、彼自身の現実の生活の葛藤を描字しているように思われる。そして他方、小さなピエールが会えるいろいろな問題は、ヘッセが幼い頃に悩んだいろいろな問題の殆んど正確な写しなのである。こうして我々は再びヘルマン・ヘッセを苦しめているいろいろな問題への、二つの異なっているが、どうやら似かよっている視点を手に入れたように思われる。……それは第一に、母親と幼い息子の冷ややかな関係から生じる葛藤への洞察の追加であり、第二に幼年期にその起源があったのだが、未解決のまま大人の時代と結婚にまで持ちこされた諸問題のより明確な解明である。

実際『ロスハルデ』という小説は、むしろ少年ピエールの諸問題と苦境の解明であって、彼が真の受け入れと愛と理解を極度に必要としている問題における、親としての相互関係の欠如を特に重要視している。自分自身のためにピエールの愛情を手に入れようと試みる際の、父親のいわゆる関心なるものにも拘らず、ヨーハンは息子の幸福に真に興味を持ち、関係を持つだけの時間を、絵を画く時間から割愛するだけの誠実ささえないのである。……多分芸術家として彼は、ピエールを悩ませているうわべは取るに足りない問題に対して、精神の集中を中断して、注意を向けることが真にできなかったのであろう。

とにかく母親は長男アルベルトの方に、より多くの愛情を注いでいった。父親の方はピエールが父親を必要としているときに、仕事の時間をさいてピエールに没頭することはできないし、それをするつもりもない。その結果少年は心身症の病気になり、そのために発熱し、ときどき頭がおかしくなる。彼の病状は精神的にも肉体的にもかなり急速に悪化して、彼のためにしてやるのが殆んどないといった状態になる。しかしピエールのこの重病でさえ、両親を結びつけるのに役立ちもしない。アデーレ・フェラグートがピエールに対する自分の権利を放棄して、もしこの子が回復したら、あなたがこの子を自分のものにしてよい、とヨーハンに告げるといふ例外はある。しかしながら両親の間にはなんの和解も生じない。そして遂にピエールは、自己中心的な父親と、自分の愛情を子供たちに平等に公平に分ち与えるのを好まない母親との、いわば犠牲者として、このひどい試練のため死ぬのである。

この小説における父親像は、これ以前の諸作品における父親の役割と、『ロスハルデ』のヨーハン・フェラグートの役割とを比較してみると、様子が変わっているのは明らかである。ヘッセの側における矛盾とか、態度の変化とかの点から、この明白な食い違いを分析するよりも、むしろ筆者はこの場合は、芸術家が社会において演じなければならない極めて困難な、ときには不可能な役割を読者に対して明らかにしたいということが、多分著者の問題であろうと感じている。ヘッセは前述の諸作品において、極めて注意深く作りあげた父親像の格を、故意に下げようと試みているのではなく、画家、作家、あるいは何であれ、芸術家のしばしば絶望的なほど孤独な生活に結びついた行詰りを、多少とも詳細に我々にちらりと見せているのである。

『ロスハルデ』における女性の役割は、これまでこの章で論じてきた例の側面と全く同じものである。アデーレ・フェラグートは、ヘッセの幼年時代に彼を大いに当惑させた、よそよそしさと近より難さの人格化なのである。アルベルト・

フェラグートは、マリーア・ヘッセの家庭の外側への関心、すなわち、布教、宣教師たちとのその家族、人類一般等に対する彼女の関心を、適切に表わしていると言えよう。ピエールはピアニストとしての卓越した腕前の故に、アルベルトに払われる注意に対して嫉妬に狂った。かくしてピエールは、アルベルトがピアノをひき始めるときはいつでも、苦痛に悲鳴をあげ身もだえるのが常であった。ヘッセはこれと同じ行動を取りはしなかったが、彼が感じた孤独と拒絶から逃れるために、確かに夢と空想の世界に閉じこもったのである。すでに述べてきたように、アデーレ・フェグラーは事実上ヘッセの最初の妻と一卵性双生児と考えられよう。そして結婚生活の間じゅう続いたヘッセ夫妻の葛藤は、フェラグートの結婚生活の描字と余りによく一致しているので、単なる偶然のせいにするわけにはいかないように思えるのである。

注

- 27 Hesse : Peter Camenzind, p. 242
- 28 Ibid. p. 246
- 29 Ibid. p. 275
- 30 Ibid. p. 276
- 31 Ibid. p. 313
- 32 Ibid. p. 326
- 33 Hesse : Gesammelte Dichtungen, Vo 1. 2, Gretrud, p. 22
- 34 See p. 76
- 35 Hesse : Gertrud, p. 110
- 36 Ibid. p. 112
- 37 Ibid. p. 113
- 38 Ibid. p. 84
- 39 Ibid. p. 91
- 40 Ibid. p. 96
- 41 Ball, p. 74
- 42 Hesse : Gertrud, p. 102
- 43 Ibid.
- 44 Ibid. p. 103
- 45 Ibid. p. 176
- 46 Ibid.
- 47 Ibid. p. 192
- 48 Ibid. p. 521

本稿は V. J. Bennett : The Role Of The Female In The Works Of Hermann Hes-

se. 1972の中の〈Hesse's PORTRAYAL OF THE FEMALE〉の後半の訳である。⁸⁴
原文には著者の記憶違いと思われる個所があるが、そのまま訳しておいた。(8
頁のターンがタイザーの注目をひくのに成功し^たとある個所) 本文の英語を内尾
一美君が訳し、引用の独語を渡辺信生が訳した。訳文について、同僚の英語科教
授柏原啓佐先生に、貴重な御意見や御指摘をいただいた。心からお礼を申しあげ
る次第である。